

2014年度 湘南藤沢学会「研究助成基金」成果報告書

Pattern Languages of Programs Conference (PLoP)における研究発表 及び 学会前後のインタビュー

総合政策学部 4年 原澤 香織

1. 活動日程・場所

【学会】

9/14 - 9/17 アメリカ合衆国・イリノイ州・シャンペーン・Allerton House

【インタビュー】

9/9 ニューヨーク州・ニューヨーク

9/12 ノースカロライナ州・アッシュビル

9/19 オレゴン州・ポートランド

2. 活動の目的・概要

本研究は、暗黙知・経験知の記述方法である「パターン・ランゲージ」を視覚的に表現する「パターン・イラスト」について、その重要性を歴史的背景から裏付けるとともに、具体的な実践方法を体系化することを目的としている。今回の活動では、まず、研究成果を Pattern Languages of Programs Conference (PLoP) というアメリカで開催されるパターン・ランゲージの国際学会にて発表した。これは、パターン・ランゲージの専門家や他の参加者から論文の内容についてアドバイスを受け、本研究の改善とさらなる向上に繋げることを目指してのことである。また、学会の前後にはパターン・ランゲージの歴史を築いてきた複数の人々に対してインタビューを行なうとともに、研究内容についても共有した。これにより、パターン・ランゲージ界における本研究の位置づけを今一度確認するとともに、今後の展開が広がるきっかけを得ることができた。



ライターズ・ワークショップの様子



研究成果を共有している様子

3. 活動の成果

PLoP への参加と、パターン・ランゲージ関係者へのインタビュー及び研究成果の共有により、大きく2つの成果が期待された。1つは、パターン・ランゲージのエキスパートたちから研究内容に対してコメントをいただき、研究成果の改善とさらなる向上につなげることである。もう1つは、世界でも初めての試みである「パターン・イラストに関する理論と方法」を示した本研究が、パターン・ランゲージ界に何らかのインパクトをもたらすことである。

1つめについては、予想通りの成果が得られた。学会中に参加するライターズ・ワークショップでは、パターン・イラストの必要性や重要性を主張して理解してもらうこと以上に、その具体的な方法を伝えて実践してもらうことの難しさを痛感した。それと同時に、その難しさをどう乗り越えていけばよいのか、という具体的なアドバイスも受けることができた。またインタビュー中には、『Fearless Change』の著者に、この研究を通して作成した『Fearless Change』のパターン・イラストを見せ、コメントをいただいた。そのなかで、パターン・イラストがこれまでの視覚的表現と比べた際にどのような特徴を持つと考えられているか、ということを知ることができた。

2つめについても、ある意味では予想通りの成果が得られた。「パターン・イラストを描きたい」という要望のある人から相談を受けたり、パターン・ランゲージのフォーマットの中にパターン・イラストが加えられたりと、学会コミュニティ内でも「パターン・イラスト」という考え方が主流になりつつあることを肌で感じた。ただし、こちらに関しては長い時間をかけて徐々に考えが浸透していくであろうと考えているため、今後の展開を見守りたい。

4. 今後の課題

まずは、11月中旬にある締切に向け、論文の最終稿の執筆に取り組む。その際、今回の活動で得られたアドバイスやコメントを十分に反映することを考慮する。現時点で提案したパターン・イラストを描くための方法論を洗練するとともに、その実践を補助するためのパターン・ランゲージの作成も計画している。また、『Fearless Change』のパターン・イラストについてのより詳細なフィードバックをいただける予定であるため、それを受け次第、イラストのクオリティを高めることにも努めたい。

[謝辞]

ご指導いただいた井庭崇先生をはじめ、井庭研究室のメンバー、助成金をいただいた湘南藤沢学会様に、このような機会を手助けいただきました。心より感謝申し上げます。